

# 平安後期勅撰集における和泉式部歌享受

——出典未詳歌を中心に——

藤川晶子

はじめに

早く吉田幸一氏の『和泉式部研究二——書承と伝承による和泉式部歌考——』<sup>1)</sup>の中で、和泉式部没後の撰集類に見える「家集未載歌（主として現存の正統集<sup>2)</sup>に見えない歌）」及び、正統集所収歌ではあるが詞書などの面で甚だしく異なる歌についての言及がある。氏はそれらの歌について「現存家集とは別の原拠本を想定」し、「種々な問題を含んでいる」が「今日では全く未詳」とされているが、果たしてどうであろうか。

本稿では吉田氏の言われる「現存家集とは別の原拠本を想定」とせる歌を一括して出典未詳歌として扱い、特に和泉式部没後平安時代後期にかけての勅撰集所収歌に焦点をあててみた。何故なら勅撰

集に採択されるという評価を問題にしたいからである。また、「和泉式部集」における前後の配列や詞書から判断して、勅撰集所収時のような形態が類推可能なものについては、詞書などに多少の相違があっても出典未詳歌としては扱わなかった。結果、吉田氏の掲出された歌よりも数的にかなり絞られることになったのをことわっておきたい。

和泉式部歌の勅撰集初出は『拾遺集』所収の一首であるが、『拾遺集』成立は和泉式部生存中のことであるのでここでは除く。以降、平安後期にかけて、和泉式部歌は『後拾遺集』に六十八首、『金葉集』二度本に四首、三奏本には二度本の四首に加え、新たに四首の計八首、『詞花集』に十六首、『千載集』に二十一首収められているが、以上の四勅撰集に共通して、前述したように現存資料の範囲内

で考える限り、出典未詳とせざるをえない歌がかなり含まれているのである。それらを便宜上、「家集未載歌」と「家集所収歌」に分け、その一々について検討していきたい。

### 一、家集未載歌

#### (一)、『後拾遺集』所収歌

をどこにわすられて侍りけるころ、きぶねにまゐりて、  
みたらしがはにほたるのとび侍けるをみてよめる

和泉式部

(二六) ものおもへばさはのほたるをわがみよりあくがれにけるた

まかとぞみる

御かへし

(二六三) おくやまにたぎりておつるたきつせにたまちるばかりもの

なおもひそ

このうたはきぶねの明神の御かへしなり、をこのこゑ  
にて和泉式部がみみにきこえけるとなん、いひつたへたる

詞書と左注に見えるように「をどこ」に見放された辛さを詠む和泉式部に対し、貴船明神の慰藉の返歌、という贈答である。が、情況設定自体が現実から遊離したものであり、左注に「いひつたへたる」とあるように、伝承歌であると言える。またこの贈答は「後拾

遺集』所収の形をもとにして『俊頼髓脳』以下「和歌童蒙抄」「袋草紙」「古本説話集」「世継物語」「無名草子」「十訓抄」「古今著聞集」「沙石集」など、平安後期から中世にかけての多くの歌学書や説話集の類でも採り上げられており、和泉式部に関する伝承歌の一として享受され続けていったことが知られるのである。

ところで、詞書冒頭の「をどこ」を「保昌」として伝えるものが、先に掲げた『俊頼髓脳』をはじめ、『古本説話集』以下のいくつかの書に見られる。このことは後述する保昌関保諱とのかかわりが推測されるものであつて、注意しておきたい。

丹後国にて、保昌、あすかりせんといひけるよ、しかの  
なくをききてよめる

和泉式部

(九九七) ことわりやいかでかしかのなかざらんこよひばかりのいの

ちとおもへば

晩年に夫とした藤原保昌に従い、和泉式部が丹後に下向した折の詠である。動物(鹿)との共感を詠出する点は和泉式部の呪術的とも言うべき歌才を象徴しており、詞書の内容を詳細にした形で『古本説話集』や『世継物語』に収められていることを考えると、やはり和泉式部にまつわる歌話伝承としての性格を有しているものと言えるであろう。

一方『今昔物語集』巻十九に「丹後ノ守保昌、朝臣ノ郎等射テ母ノ成

鹿<sub>ト</sub>出家語」とあり、鹿狩と保昌とは密着して説話の題材となつて  
いることが知られるのであるが、『曾我物語（仮名本）』においては、  
右の歌を聞いた保昌が道心を起こし、鹿の供養をするに至つてゐる。  
このようなことを考え合わせると、和泉式部の歌才、歌徳が出家志  
向などの仏教思想と結合し、鹿狩りを好む夫保昌像と共に享受され  
ていく様相が窺えるのであり、先の貴船明神との贈答歌の伝承との  
かわりも想像されるところである。

ひとのもとにふみやるをとこをうらみやりて侍けるかへ  
りごとにあらがひ侍ればよめる  
（和泉式部）

（九二六） そらになる人の心にささがにのいかにけふまたかくてくら  
さん

浮気について抗弁する「心」も「そら」の男に対し、またも手紙  
をしたためてしまう和泉式部を詠出しており、「そら」「ささがに」  
「い（くもの巢）」の縁語関係や、「（手紙を）書く」と「（くもの巢  
を）懸く」との掛詞などを駆使した技巧的な歌である。

ところでこのような技巧や駄洒落的要素が、歌話を生じさせるこ  
との多いのは知られているところであり、この歌に關しても、平安  
後期から中世にかけての説話集などには採り上げられていないなが  
らも、歌話伝承への種子を内包するものであると言えるであらう。  
また、「をとこをうらみや」る和泉式部の恋愛生活における一面を

採り上げるものであることも指摘しておきたい。これは先の貴船明  
神との贈答が「をとこにわすられて」という設定であることや、夫  
である保昌との関係を伝えるものとかかわりが推測され、同様な  
情況設定は以下に掲げる多くの和泉式部歌についても見られるので  
ある。

## （二）『金葉集』所収歌

和泉式部石山にまゐりけるに、おほつにとまりて、よふ  
けてききければ、人のけはひあまたしてのしりけるを、  
たづねければ、下人のよねしらげ侍るなりとまうしけれ  
ばよめる  
和泉式部

（五五六） さぎのゐるまつばらいかにさはぐらんしらげはうたてさと  
とよむなり

三奏本では歌結句「さととよみけり」とあるが、詞書は二度本と  
ほぼ同様である。米を精白することを鶯の白毛と同じく嫌悪し、大  
騒ぎする里人を詠出したものであり、「しらげ」という俗語使用に  
特色があり、それが撰者俊頼の志向とも合致したと思われる。この  
ような俗語の奇抜さから生じる話題性と共に、詞書自体に具体性が  
あり、この歌に關しても何らかの場面設定を伴った伝承背景が想起  
されるのである。

また、先の『後拾遺集』(二二六二)(二二六三)が和泉式部貴船参詣時の詠であるのに対し、この歌は石山参詣時の詠である点に一つの共通項が認められる。このことは次に掲げる和泉式部賀茂社参詣歌をも合わせると、一連の寺社参詣譚の存在も推測されるのである。

和泉式部がかもにまゐりけるに、わらうづにあしをくは

れてかみをまきたりけるをみて

神王忠頼

(六五〇) ちはやぶるかみをばあしにまく物か

和泉式部

これをぞしものやしるとはいふ

和泉式部が賀茂(下鴨)神社の神主の上司に対し下句を付して成った一首であり、三奏本にも同様に収められる。対語や掛詞を巧みに用いた詠であるが、貴船明神との贈答と同様に、現実的設定であるとは言い難い。またその駄洒落的要素も『後拾遺集』(九二六)に同じく、歌話を生じさせる要因となりうるのである。

ところで先の(五五六)にも共通することであるが、その詞書が「和泉式部」という三人称で始められていることに注目したい。

即ちこのことも(五五六)や今採り上げている(六五六)が歌話伝承として語られてきた背景を示すものであると言えるのではないか。

『金葉集』には、以上の他、出典未詳歌としては次の一首が存する。

地獄絵につるぎのえだに人のつらぬかれたるを見てよめる  
和泉式部

(六四四) あさましやつるぎのえだのたはむまでこはなにの身のなれ  
るなるらん

三奏本にも同様に収められ、『宝物集』では「地獄の屏風を見て」とあるので屏風絵を見ての詠であることが知られる。「枝」「たはむ」「み(実)」「なる」の縁語関係や「身」と「実」などの掛詞を駆使した一首であり、詞書自体に場面性や具体性が看取されるとは言い難いものの、寺社に参詣する和泉式部像に通じる「罪深い」自己を地獄絵の罪人に投影して表現したものであると言える。加えて後掲の一首『金葉集』(六二〇)と合わせて、二度本所収の和泉式部歌四首のうち、(六四四)以外の三首がすべて何らかの場面性を伴った伝承歌である蓋然性が強いことを思えば、この(六四四)の伝承歌としての可能性も強ち否定しきれないように思うのである。

(三三)、『詞花集』所収歌

しのびけるをこのいかがおもひけむ、五月五日のあし  
たに、あけてのちかへりて、けふあらはれぬるなむうれ  
しきといひたりける返事によめる

和泉式部

(三二) あやめ草かりにもくらむものゆゑにねどのつまとや人のみ

つらん

「しのびけるをとこ」が「あけてのちかへ」といった人目にくく行為をとったことを責める詠であり、これも和泉式部と「しのびける」仲の男との交際を伝える。「五月五日」の逢瀬を記す詞書の場面性の顕著なさまはもとより、歌にも掛詞、縁語が多用されており、話題性に富んでいる。

また、次の一首も出典未詳であり、「をとこをうら」む和泉式部を伝える点で前掲の『後拾遺集』(九二二)に通じている。

をとこをうらみてよめる

和泉式部

(三三三) あしかれとおもはぬやまのみねにだにおふなるものを人の  
なげきは

詞書に具体性はないが、「なげき」に「木」を掛けた駄洒落的要素や、「あしかれ」に「蘆刈れ」を響かせたであろう詠諧的技巧は、繰り返し述べてきたように歌話伝承への種子となることが多いのである。

## 二、家集所収歌

### (一)、『後拾遺集』所収歌

続いて現存『和泉式部集』など現存家集に該当歌が見出されるに  
かわからず、勅撰集がそれらの文献から直接的に採歌したとは思わ

れず、先の出典未詳歌と同様の扱いをせざるをえないものを採り上げてみたい。

小式部内侍なくなりてむまごどものはべりけるを見てよ  
みはべりける  
和泉式部

(五六八) とどめおきてたれをあはれとおもふらんこはまさるらんこ  
はまさりけり

『和泉式部集』においては詞書は付されておらず、

(四八五) とどめおきてたれをあはれと思ひけんこはまさるらんこは  
まさりけり

として収められる。『後拾遺集』所収時と比較すると、歌三句「思ひけん」と「おもふらん」との相違をはじめ、詞書の有無についても異なっていることが知られる。但、『和泉式部集』(四八二)から(四九八)までの一七首は小式部内侍の死を悼む歌群であり、これを現在のような形で享受していた『後拾遺集』撰者が、その内容に照応させて詞書を付したと考えることも可能ではある。しかし、この歌が『栄花物語』に

……………小式部の母和泉式部、こどもをみて、とどめおきてたれを  
あはれと思ふらんこはまさりけりこはまさるらん、とよみ  
けり。…………

として収められていることを考慮すれば、『後拾遺集』の採歌材料

は『栄花物語』もしくはその資料となった同様の系列の内容のものであったと考える方が自然であろう。『栄花物語』該当部成立の時点においてこの歌は既にこのような形で享受されていたのであり、実際、『古本説話集』『世継物語』『宝物集（一卷本）』『古来風体抄』『無名草子』など多くの書に、同様の形で収められ、一つの歌話を形成しているのである。

これは娘小式部内侍を亡くした母親としての和泉式部像を伝えているが、このように小式部内侍をめぐる母親和泉式部の歌としては、以下に掲げるものとの共通性が認められる。

小式部内侍のもとに二条前太政大臣はじめてまかりぬと

きまてつかはしける

堀川右大臣

(九二) ひとしらずねたさもねたしむらさきのねずりのころもうは

ぎにをきん

かへし

和泉式部

(九三) ぬれぎぬと人にはいはむむらさきのねずりのころもうは

なりとも

小式部内侍の浮気を妬む堀川右大臣頼宗に対し、母親である和泉式部が娘のぬれぎぬを主張する贈答歌である。これは『和泉式部集』には見られず、『入道右大臣集』に両首共、収められているのであるが、その『入道右大臣集』においては「かへし 和泉式部」なる

詞書は存在しない。(九二)を「かへし 和泉式部」を省いて考えるなら、責められた小式部内侍当人の返歌と判断するのが最も自然であるにもかかわらず、『後拾遺集』が和泉式部の返歌であると明示した背景に、前掲(五六八)の場合と同じく、娘小式部内侍を思いやる母親としての和泉式部を語る場の存在が想起されるのである。さらに『袖中抄』をはじめ、『色葉和雜集』『顕注密勘』『五代勅撰』などに、『後拾遺集』乃至はそれを引用した『袖中抄』を基として、この贈答歌が採り上げられている事実も、そのような歌話伝承の可能性を裏付けていると言えるであろう。

## (二)、『金葉集』所収歌

小式部内侍うせてのち上東門院より年ごろたまはりける

きぬをなきあとにもつかはしたりけるに、小式部とかき

つけられて侍りけるを見てよめる

和泉式部

(六二〇) もろともにこけのしたにもくちもせでうづまれぬなを見る

ぞかなしき

三奏本にも同様に収められており、これも前掲『後拾遺集』所収の二首と同じく、小式部内侍の死を悲しむ母親和泉式部を表出している。

なお『和泉式部集』においては

内侍なくなりてつぎの年七月われい□るふみになほなのかか  
れたるを

(五四五) もろともにこけの下にはくちくちずしてうづまれぬなをみるぞ  
悲しき

とある。歌句の異同に問題となるべき点はないが、『金葉集』「和泉式部集」相互の詞書を比較すると、その甚だしい相違が知られる。

まず、『和泉式部集』詞書から『金葉集』のような具体性を導き出すのは不可能と言つてよい。そして逆に『和泉式部集』における「つぎの年七月」という具体的年時について、『金葉集』が全く触れていないことにも気付くのである。従つて『金葉集』が『和泉式部集』から採歌したとは言ひ難く、やはりこの一首についても、娘小式部内侍をめぐる母親和泉式部を語る歌話伝承の存在が思われるのである。また、『金葉集』所収時の形をさらに説明的にしたものが『玉物集』『無名草子』『沙石集』『曾我物語(仮名本)』などに引用されており、その場面性、話題性は否定しえない。

保昌にわすられてのち兼房がとぶらひ侍りければ

和泉式部

(三五〇) 人しれずものおもふことはならひにきはなにわかぬ春し  
なければ

和泉式部が夫保昌と別離した後、兼房のとぶらひに對して返した

歌であり、三奏のみに収められ、『詞花集』にも入集する。

ところで『金葉集』は『玄々集』からの採歌が多く、この場合も採歌の直接的資料は『玄々集』であると思われる。その『玄々集』では「和泉式部六首」中の一首として

保昌にわすられてのち備中守かねふさ世の中をばいかか  
おもふとありければ

(二三三) 人しれず物おもふことはならひにきはなにわかぬ春しな  
ければ

とあり、『金葉集』とはほぼ一致する。そしてこの『玄々集』の拠つた資料を考えると、現存の範囲内では『和泉式部集』とするよりほかはない。しかしその『和泉式部集』では

人のかへりごとに

(五八三) としをへて物おもふことはならひにきはなにわかぬ春し  
なければ

となつており、『玄々集』ひいては『金葉集』と比較するに、初句の異同をはじめ、詞書も全く異なっていることが知られるのである。つまり『和泉式部集』の「人のかへりごと」との詞書が簡略にすぎるのに加え、『和泉式部集』における前後の配列から「保昌にわすられ」た状態であることは把握しえても、『玄々集』の記す「兼房」という具体的人物名を知る手がかりは何ら存在しないのである。

今迄に和泉式部の夫保昌に関する歌話の存在の可能性は指摘してきたところであるが、今の歌についても保昌にまつわる歌話の中で、恋愛歌人としての和泉式部の一面も窺わせる、「兼房」という第三者とのやりとりを伝えたものではないかと思われてくるのである。

(三)、『詞花集』所収歌

藤原保昌朝臣にぐして丹後のくにへまかりけるに、しのびてものいひけるをとこのもとへいひつかはしける

和泉式部

(二四〇) われのみやおもひおこせむあぢきなくひとはゆくへもしらぬものゆゑ

この歌も、保昌に従って丹後に下向するために別れねばならぬ男に対する名残惜しさや執着が詠出されており、保昌を夫として持ちながらも「しのびてものいひけるをとこ」とも交際する「色好み」和泉式部像を伝えているものである。『詞花集』採歌の材料としては『和泉式部集』以外には考えられないのであるが、その『和泉式部集』においては

又、人に

(七五六) われのみやおもひおこせむあぢきなく人はゆくへもしらぬものゆゑ

とあり、先の『和泉式部集』(五八三)と同様に、「又、人に」といった全く簡略な詞書が付されているのみであって、『詞花集』のような具体的詞書の扱ふ所は不明とするほかはない。また『和泉式部集』における当該歌の前後の配列からも『詞花集』の資料とすべき具体性は得られない。ゆえにこの歌についても前述の保昌関係譚とのかかわりの中で和泉式部の「色好み」な恋愛を伝えたものである蓋然性が存するのである。

以上、『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』所収和泉式部歌のうち、現存資料の範囲内で考える限りにおいて出典未詳であると判断される歌について考察してきた。もつとも、今、掲出してきたもの以外に、例えば「題不知」詠など、元來何らかの題詠歌ではなかったかと思しき出典未詳歌も二、三首存在するのではあるが、しかし、出典未詳歌の殆どが和泉式部歌話伝承とでも言うべきものに由来するのではないかと思われるに至ったことは注目してよい。そして、それらを概括すれば、次のように数種の話型に分類しうることに気付くのである。

まず、『後拾遺集』(二六二)(二六三)や『金葉集』(六五八)に代表される、神との唱和などといった現実離れた設定における詠である。これらは、当時和泉式部が、神仏と交歓しうるほどの技量



を備えた歌人として捉えられていたことを端的に示している。しかも、このことは『後拾遺集』(九九九)における、鹿との共感を得た和泉式部像にも繋がるものであって、和泉式部詠の持つ、呪術的とも言うべき力が表出されているのである。

次に、『後拾遺集』(九九九)や『金葉集(三奏本)』(三五〇)、『詞花集』(二四〇)などの、藤原保昌関係譚がある。保昌は和泉式部にとって最後の夫であり、彼女の晩年の生活を伝えるにあたって、保昌との夫婦関係、又その破綻が歌話の基軸となったのであろう。そしてそれらとかわかるものとして、『後拾遺集』(九二六)や『詞花集』(三二二)、(三三三)、さらには前掲の『金葉集(三奏本)』(三五〇)や『詞花集』(二四〇)などの、若年時はもとより、保昌と結婚し、さらに別離した晩年に至ってもなお、多様な恋愛生活を営む和泉式部像を表す数々の伝承歌が存在するのである。加えて言うなら、それらの歌においては「を」とこにわすられ「た状態」「うらみや」る心理、「しのびてもいいひける」関係、などといった、相手の男との別離の悲嘆、ないしは公にできぬ恋愛が伝えられている。男女の恋愛関係におけるこのような慨嘆すべき情況が、満ち足りた関係に比べて和歌の題材になりやすいのは周知のところであるが、しかし恋愛面における悲劇的、或いは「罪深き」形象が、和泉式部伝承において主流となっていたであろうことは、中世説話集や

御伽草子の流れに繋がるものとして理解されよう。また、こうした悲劇的でしかも「罪深き」和泉式部を表出する恋愛譚の伝承される中で、『後拾遺集』(二六二)(二六三)の贈答や、『金葉集』(五五六)、(五六六)などに見える、神仏に対して慰藉を求める和泉式部寺社参詣譚が生じたのではないだろうか。

さらに、『後拾遺集』(五六八)や(九一一)(九一二)の贈答、『金葉集』(六二〇)などの、娘小式部内侍をめぐる母親としての和泉式部像を伝えるものが存する。これらは、時期的には保昌と結婚した和泉式部晩年の頃に取材したものである点で共通している。また、小式部内侍に対する母親としての愛情の深さを伝えると同時に、『金葉集』(六二〇)に見えるように、死してもなお「うづまれぬな」を持つほどの歌才豊かな小式部内侍を生んだ母親である和泉式部自身の、歌人としての偉大さをも表出しているとも言えるであろう。以上のように、その歌話伝承の話を検討してみると、恋多き「色好み」である和泉式部が、その「罪深き」恋愛のために神仏に慰藉を求めるに至り、しかもそれが叶えられるほどの非凡な歌才を持つ人物として造形され、特にその晩年の生活が、最後の夫である藤原保昌や、娘の小式部内侍らの周辺人物とのかかわりの中で伝承されていたであろう様相が次第に明らかになってくるのである。

さて、ここで、和泉式部詠ではないが、『金葉集』に収められて

いる有名な一首を掲げておきたい。この歌も現存資料の範囲内で考  
える限りでは出典未詳であり、小式部内侍の機知を描出する一方で、  
その母親である和泉式部が、その和歌の才能の豊かき、秀逸さの面  
において、既に世間で公認されていたことを、最後の夫保昌をも絡  
めながら伝えている。

和泉式部保昌にぐして丹後にはべりけるころ、みやこに  
歌合侍りけるに、小式部内侍うたよみにとられて侍りけ  
るを、定頼卿つほねのかたにまうできて、歌はいかがせ  
させ給ふ、丹後へ人はつかはしてけんや、つかひまうで  
こずや、いかに心もとなくおほすらんなど、たはぶれて  
たちけるをひきとどめてよめる 小式部内侍

(五五〇) おほえやまいくのみちのとほければふみもまだみずあま  
のはしだて

三奏本にも同様に収められている。詞書自体に具体性、場面性が  
看取されることは言うまでもない。歌二句が「いくのさとの」と  
して掲載される『俊頼髓脳』以下、歌四句が「まだふみもみず」と  
なっている『袋草紙』『古今著聞集』『十訓抄』『無名草子』など、  
若干、歌句に異同を持ちながらも同様の情況設定で、平安後期から  
中世にかけての数多くの歌学書や説話集に引用されている。即ち、  
この一首に關しても、今まで述べてきたような歌話伝承としての性

格を持つものであることは否定しがたく、内容的にも前述の話型と  
の強いかかわりが看取されるのである。

### 三、『千載集』所収和泉式部歌

『千載集』には合計二十一首の和泉式部歌が収められていること  
は冒頭で述べた通りであるが、中でも特徴的であると思われる点は、  
一つに、二十一首中十三首までが「題不知」詠であることである。  
このことは即ち、『千載集』に至って和泉式部歌が、歌話伝承の中  
で享受される以外に、独立した一首の和歌として評価される傾向が  
生じてきたことの顕著なあらわれと言えるであろう。もしくは、詞  
書がなくとも当該歌を理解しうるに足る、和泉式部に対するイメー  
ジが既に定着していたとも考えられる。

しかし、これら「題不知」詠の中にも一首、出典未詳とするより  
ほかはない歌が含まれているのである。

#### 題不知

和泉式部

(八四〇) いかにしてよるの心をなぐさめむひるはながめにさてもく  
らしつ

『千載集』においては所謂「帥宮挽歌群」や「親身論命歌群」な  
ど、現存「和泉式部集」所収の諸歌群からの採歌が多く、その殆ど  
が「題不知」詠として扱われているため、この一首についても、元

来何らかの歌群中に含まれていたものが後に脱落した、とも考えられるのであるが、例えば「よるの心をなぐさめむ」といった表現に、「色好み」としての和泉式部像が認められることは否定しえない。「後拾遺集」以降『詞花集』に至る間に享受された和泉式部歌話に繋がる一面が、この「題不知」の詠の中にも依然として見られることに注目されるのである。

ところで、それよりも注目すべき事実が『千載集』の採択した和泉式部詠の中に認められる。それは『千載集』に至って初めて現存『和泉式部日記』関係歌が二首、採り上げられていることである。

彈正尹爲尊のみこかくれ侍りてのち、太宰帥敦道のみこ  
はなたちはなをつかはして、いかがみるといひて侍りけ  
ればつかはしける  
和泉式部

(九七) かをるかによそふるよりはほととぎすきかばやおなじこゑ  
やしたると

この歌は『和泉式部集』にも次のような形で収められている。

そちのみや、たちはなの枝を給はりたりし

(二三七) かをるかによそふるよりは郭公きかばやおなじこゑやした  
ると

また『和泉式部日記』における該当部分も引用しておく。

……………これもてまゐりて、いかがみ給ふとてたてまつらせよ、と

のたまはせつるとて、たちはなの花をとりいでたれば：  
(中略) ……はかなきことをも、と思ひて

かをるかによそふるよりはほととぎすきかばやおなじこ  
ゑやしたると  
ときこえさせたり。……………

以上を比較すれば、『和泉式部集』における詞書が簡略にすぎたため、『千載集』が『和泉式部集』を採歌の直接資料にしたとは考えられないのに対し、『千載集』と『和泉式部日記』とは、情況設定も含めてほぼ一致していることが知られる。ゆえに『千載集』が『和泉式部日記』に依拠して採歌した可能性は十分に存在すると言えよう。しかし、例えば「きかばや」という、帥宮に対する積極的姿勢を表す句を中心に、やはり「色好み」的な和泉式部像が伝えられているのは否めず、加えて、和泉式部と為尊親王との間には「熱烈な恋愛」と呼べるようなものはなかった、とする藤岡忠美氏の説をも考慮すれば、為尊と和泉式部との恋愛を前提として言及する『千載集』や『和泉式部日記』が、今迄述べてきたような和泉式部に関する歌話伝承を材料として成っている可能性も出てくるのではないだろうか。これは一見奇抜とも言える考え方ではあるが、次に掲げる歌と一括して考えるなら、強ち無理な推論とも思えないのである。

太宰帥敦道のみこなかたえ侍りけるころ、秋つかた思ひ  
いでてもものして侍りけるによみ侍りける 和泉式部

(六四) まつとてもかばかりこそはあらましかおもひもかけぬ秋の  
夕ぐれ

この歌は『和泉式部集』ではなく、『千載集』の採歌資料として  
考えるのは『和泉式部日記』のみである。そしてその『和泉式部  
日記』には以下のように記されている。

……(帥宮の来訪) ……あやしかりける身のありさまかな、こ宮の  
さばかりのたまはせしものを、とかなしくてもおもひみだる、  
ほどに、れいのわらはきたり。御文やあらんと思ふほどに、  
さもあらぬを心うしとおもふほどもすきずきしや。かへり  
まゐるにきこゆ

またましもかばかりこそはあらましかおもひもかけぬけ  
ふのゆふぐれ

御らむじて、げにいとほしうもおぼせど、かかる御あり  
きさらになせさせ給はず。……

『千載集』と『和泉式部日記』とを比較すると、まず、詞書冒頭  
の「太宰帥敦道のみこなかたえ侍りけるころ」に対し、『和泉式部  
日記』では帥宮の来訪の直後である点において、情況設定に相違が  
見られる。さらに歌句についても初句「まつとても」に対し「また

ましも」、及び結句「秋の夕ぐれ」に対し「けふのゆふぐれ」と、  
異同が存する。つまり『千載集』では「もし侍っていてお逢いでき  
たとしてもこれほど嬉しかっただろうか。思いがけぬ(寂しい秋の)  
嬉しい来訪であったことよ」と帥宮の来訪に対する「喜び」を前提  
とした歌である一方で、『和泉式部日記』では「決して帥宮の来訪  
を待っていたわけではない、待てるような立場ではないが」もし  
待っていたとしてもこれほど辛かったであろうか。帥宮が思いもか  
けてくれぬ、そして思いがけないほどに辛い今日の夕暮であること  
だ」というように、帥宮の来訪の無いことに起因する「辛さ」を前  
提としており、一首の持つ意味合いが異なってしまうのである。ま  
た、時節の設定においても、『千載集』が「秋つかた」であるのに  
対し、『和泉式部日記』に拠れば、日記冒頭に記される「四月十余  
日」からそれほど日数を経ているとは思えぬ頃の出来事として描か  
れており、「秋つかた」であるとは到底考えられない。

ところで『古本説話集』にも同様の記事が収められているので、  
ここに引用しておきたい。

いまはむかし、和泉式部がもとに帥宮かよはせ給けるころ、  
ひさしくをとせさせ給はざりけるに、その宮にさぶらふわ  
らはのきたりけるに、御文もなし。かへりまゐるに

またましもかばかりこそはあらましかおもひもかけぬ今日

## の夕ぐれ

もてまゐりてまゐらせたりければ、まことにひさしく成にけり、と心ぐるしくて、やがておはしましけり。

「ひさしくをとせさせ給はざりけるに」という設定は『千載集』詞書に通じるものであるが、歌については『和泉式部日記』と同一である。しかし『和泉式部日記』における帥宮の反応が「かかる御ありきさらにせさせ給はず」であるのに対し、『古本説話集』では「やがておはしましけり」となっており、全く正反対であると言ってもよい。『古本説話集』では現存『和泉式部日記』所出の幾つかの場面を繋げて引用した形になっており、仮にそのようにして成ったとするなら、場面展開や話し接続の便宜上、それぞれの引用箇所結末部を恣意に改めたとも考えることができるが、いずれにせよ現存の形態での『千載集』『和泉式部日記』『古本説話集』の間に、完全な内容の一致は認められないのである。従って『千載集』がこの場合、何に基づいて採歌したのか判然とせず、やはりこの歌についても今迄述べてきたような歌話伝承が、その性質として細部に多様な異同を持った種々の話型で享受されていく中で語られてきたものではないかと思われるのである。さらに『和泉式部日記』における「……こ宮のさばかりのたまはせしものを、とかなしくて……」に見られる為尊との「熱烈な恋愛」を示す部分を、先の場合と同様

事実にあらずと考えるなら、現存『和泉式部日記』の虚構性を問題にするべきところであり、少なくともそのある部分が、和泉式部にまつわる歌話伝承によって成立したのではないかという考えも、強ち排除するべきものではないと考えられてくるのである。

以上のように『千載集』所収『和泉式部日記』関係歌は、現存『和泉式部日記』からの直接引用とは断定できないことが知られた。また『古本説話集』も現存『和泉式部日記』を直接の材料としていたとは言い切れず、現存『和泉式部日記』本文をまとめて引用したかのように「……と日記にかきたり」とあること11に關しても、『古本説話集』の言う「日記」が果たして現存『和泉式部日記』と同一のものであったかどうかは不明と言うよりほかはない。そしてそこに『後拾遺集』以来脈々と承継がれてきたであろう和泉式部歌話伝承の存在が『千載集』においても否定しがたいものとして浮上してくるのである。

## むすび

『後拾遺集』『金葉集』『詞花集』『千載集』といった、和泉式部没後、平安後期にかけての勅撰集入集和泉式部歌のうち、出典未詳歌を検討するに、その殆どが歌話伝承にかかわる性質を持っており、幾つかの話型が相互に絡み合いながら享受されていたであろうこと

は、繰り返し述べてきた通りである。

『後拾遺集』の時代から和泉式部の和歌についても説話の材料となるものがあつた、ということは既に指摘が存するが、このように和泉式部は死後僅か五十年ほどしか経ていない時代において伝説化されるほどの人物であつたのであり、このことは『後拾遺集』における和泉式部百首の高い評価にも表れている。まさに兩乞い説話を生んだ能因法師にも匹敵するほどの有名歌人としての扱ひを受けているのである。

中世以降、さまざまな和泉式部伝説が語り継がれて現在に至つており、時代が下るにつれ出典の不明な和泉式部歌が増加してくるのであるが、このような、明らかに和泉式部偽作と判断されるものは異なり、和泉式部生存時に限りなく近い平安後期の勅撰集において、その歌話伝承が脈々となされていたであろうことを裏付ける出典未詳歌の存在は、和泉式部が如何に非凡な歌人として注目を浴びてきたかを明確に示し出すものと言えるであろう。

また現存『和泉式部日記』に関して言及するなら、『千載集』に至つて初めて『和泉式部日記』関係歌が採択されたという事實は即ち、それ以前の段階において、『和泉式部日記』に記されたような内容が、未だ和泉式部当人の事象を語るものとして定着していなかつたことを示すとも考えられるのではないだろうか。つまり、前述し

たように現存『和泉式部日記』の虚構性や歌話伝承的性格の可能性をも考慮した上で、改めてその成立について考え直す必要があるように思われるのである。

『後拾遺集』以降の勅撰集において伝えられてきた恋多き関秀歌人としての和泉式部像が『千載集』に至つてなお明確に位置づけられることになつた様相が、現存『和泉式部日記』関係歌を通して看取されるのである。

(\*1) 古典文庫 昭42・10月

(\*2) 『和泉式部正集』及び『和泉式部統集』。なお、以下まとめて『和泉式部集』と称することとする。

(\*3) 以下歌集の引用はすべて原則として『新編国歌大観』に拠る。

(\*4) 以下『金葉集』の引用は特記せぬ限り、二度本に拠る。

(\*5) 引用は岩波日本古典文学大系『栄花物語』に拠る。

(\*6) 「七月われい〇るふみに」の部分、「七月にれいのうるしふみに」「七月にれいやるふみに」とする異本もあるが、いずれにせよ、『金葉集』詞書との相違は甚だしい。

(\*7) この一首については三奏本に拠る。

(\*8) 引用は岩波文庫本『和泉式部日記』に拠る。

(\*9) 藤岡忠美氏「和泉式部伝の修正——為尊親王をめぐって——」〔文学〕昭51・11月)

(\*10) 引用は岩波新日本古典文学大系『古本説話集』に拠る。

(\*11) 『古本説話集』上「六、帥宮通」和泉式部「給事」の一節。

(\*12) 伊藤博氏「後拾遺集の和泉式部の和歌」

〔大妻国文〕15・昭59・3月)

(\*13) 拙稿「後拾遺集における和泉式部歌享受——百首歌を中心に——」〔関西大学「国文学」〕72・平6・12月)

なお本稿は、平成六年十月二十三日、同志社大学にて行われた中古文学会秋季大会における発表に基づくものです。御教示を賜りました諸先生に心から御礼申し上げます。